

平成 27 年度第 2 回北海道大学次世代大学力強化推進会議 国際分科会 議事要旨

日時 平成 28 年 2 月 19 日 (金) 14:00~16:00

場所 北海道大学事務局 1F 第 1 会議室 A

出席者 (学外委員)

井上, 野崎, カセム の各委員

出席者 (学内委員)

上田 (議長), 新田, 徳久 の各委員

出席者合計6名

陪席者

友成, 寺尾, 波多野, 長島, 鈴木, 川野辺, 島

計7名

欠席委員

ヴィーツォレック (学外), 加藤 (学外), 三上 (学内) の各委員 計3名

(以上, 敬称略)

議題 1 出席者確認 (資料 1)

議長より, 資料 1 に基づき, 委員及び陪席者の紹介が行われた。

議題 2 前回議事要旨の確認 (資料 2)

議長より, 資料 2 に基づき, 平成 28 年 12 月 3 日の平成 27 年度第 1 回北海道大学次世代大学力強化推進会議 国際分科会の議事要旨の確認があり, 了承された。

議題 3 IAU 国際外部評価における自己評価について (資料 3)

寺尾副学長より, 資料 3 に基づき, 前回の分科会での意見を踏まえて設計した自己評価の方法について説明が行われた。また, 議長より, 次回の分科会で自己評価書案について意見を伺う予定である旨, 補足があった。その後, 次の意見及び質疑応答があった。

- ・ 2010 年の ISAS (IAU 国際外部評価) を行った際の評価結果や資料などは, Institutional archive のような扱いになって, 北海道大学の教職員がいつでも参照できるようになっているか。
 - そのようにはなっていない。
- ・ 評価報告書は, 北海道大学教職員の Common resource にした方が良い。
- ・ 研究科長レベルの研修会などを通じて, 評価報告書を学内に伝えるのが良い。
 - 今回の IAU 国際外部評価の最終報告書は, 学外には公開しないが, 学内全体で共有する。いつもどこかの部屋に常備しておくといったことも考え得る。

- ・ 外部評価は非常にエネルギーを使って行うものであるから、報告書は受け取った後にしっかり使った方が良い。
 - 最終報告書を受け取って1年後にIAUから、事後対応の内容について問い合わせが来る予定であるため、当然、最終報告書を活用していく。
 - 総合IR室も稼動したので、最終報告書を学内全体で共有していく。
 - 最終報告書を共有するのは必要である。今まで各セクションの保有情報をなかなか共有できなかった。今後は、学内の様々な情報を一つにまとめて、いろいろな部署で常時使い、それをベースに政策を作り上げていくといったプロセスを作っていくかなくてはいけない。
- ・ 外部評価を通じて建設的な方向性が見い出されていけば、いい機会になる。
- ・ 自己評価について書く際に、北大は何を訴えるのか留意する必要がある。
- ・ 「北大の10年後の姿」とあるが、なぜ10年で5年ではないのか。
- ・ 先回の外部評価時とは異なり現在は、総長の役割が格段と増えたとの発言があったが、外部評価委員に対して、どうしてそういう変化が生じたのかを理解してもらうことが非常に大切である。
 - 2026年の北大創基150周年に向けて、HUCIで10年間取り組む目標がある。
 - 2014年からHUCIに取り組んで5年目に中間評価があり、その時点の数値目標がある。
- ・ SGUが採択されて大学改革が始まるのではなく、もともと大学改革をやろうとしているところに、SGUが採択されてもっと進めたということを書いた方が良い。
 - 近未来戦略150がまずあり、その手段としてHUCIを使い、政府の資金支援を得て取り組んでいる。これは大事な経緯であるので、自己評価書にも記載する。

議題4 アンバサダー・パートナー制度について

～本学の国際ブランディング構築に向けて～（資料4）

長島総長補佐より、資料4に基づき、国際ブランディングの構築に向けたアンバサダー・パートナー制度について説明が行われた。その後、次の意見及び質疑応答があった。

- ・ 国際戦略と広報戦略は、ある意味、表裏一体である。このことについて、グローバルリレーション室という責任部署が設置されたことは、北大の国際化政策にとって大変いいことである。
- ・ 色々な人にアンバサダーやパートナーという役割を頼んでも、実際に活動していただかなくては意味が無い。しかも、活動する背景に北大に対する愛校心、あるいは北海道、札幌に対する愛着というものが根にあり、ぜひ、自分たちの国の後輩をこの大学に行かせたいという思いを持っていただかなければ、アンバサダー・パートナー制度をつくるだけには意

味がない。そういう意味で、この制度に命を吹き込むという言葉は大変大事な言葉である。

- アンバサダーやパートナーを任命後、適切な情報を間断なく提供せねばならない。20年前の北大はああだったと、今の北大とずいぶん違うイメージで語られてはいけない。今の北大はこういう状況の中で、こういうことを目指しているというのを、正確にその人たちが知っている必要がある。
- アンバサダーやパートナーに十分活動してもらうには、交通費など費用が必要である。愛校心だけでは十分な活動は難しいが、その設計が今の説明ではよく分からない。
- 医学部の出身であっても、農学部出身でも、「あの人に任せよう」という人徳のある人を選ぶことが重要である。そういう人の任命を積み重ねると、大学のブランディングが自ずとできてくるであろう。

→ このアンバサダー・パートナー制度の発想の元は、新渡戸カレッジのフェロー制度である。同窓生が学生のメンターとして熱心に教育に関わってきた。4~5年前に日経新聞が東京のサラリーマンを対象にアンケート調査をしたが、北大 OB・OGの母校に対する満足度が100%であった。北大は昔から大括り入試を行っており、1年生のとき、色々な学部の学生が同じクラスにいた。それが、社会人になって東京に出たときに極めて大きな資源になっているようだ。他の国立大学ではあまり育たなかった愛校心があり、これは活用できるというのが、アンバサダー・パートナー制度の発想である。海外に居住する卒業生に対し、今回、新しくキャッチ・コピー事業を行うが、彼らに今の北大をどう伝えるか、重要である。キャッチ・コピー事業は、ネットを使って、現役の学生と昔の学生の相互作用ができる点に期待できる。

- アンバサダーやパートナーは、留学生でも、海外で活躍している日本人でもよい。
- 平成28年度の任命目標数が33人ということは、一本釣りのな依頼をするのか。
 - 平成28年度に任命する候補者の目処はついている。その方々を核にして、平成35年度までに330人という目標を達成する。
- アンバサダーとパートナーの違いは何か。
 - アンバサダーは、現地の大学の学長を務めているなどトップレベルの方。
- アンバサダー・パートナー制度を運用していく上で、具体的な貢献領域をはっきりさせれば、北大の担当者は達成感を得られるであろう。3つほど領域を考えてみると、ひとつは、アンバサダー・パートナーを学生リクルートに役立てる。これはリクルートする留学生の数値目標が立てられるし、成果が分かりやすい。もう一つは、アンバサダー・パートナーの国の開発協力につなげる。北大と付き合い合うことによって、自分の国も地域も発展するのだということを、現地の新聞などで報道してもらう。最後に、アンバサダー・パートナーを通じて、各国のinfluentialな方々を活用できるようなネットワークをつくるということも考えられる。

- ・ 数十年かからないと成果が分からないということではなく、小さな成果でも出していくことによって、担当者は元気が出るもの。だから、アンバサダー・パートナーを活用する領域を決めて、その領域ごとに目標を設定することで、アンバサダーやパートナーに何を期待するか明確にする必要がある。留学生のリクルートであれば、この地域から何人といった目標である。日本人学生が卒業後に海外に勤められるような環境づくりに役立てても良い。
- ・ アンバサダー・パートナーに誰を任命するのかという点で、平成 28 年度は目処が立っているから問題はないが、来年、再来年、その次はどうするかといったら、やはり戦術があった方がいい。
- ・ JICA 研修員 OB の同窓会を各国に設立し、各国の JICA 事務所が同窓会の活動を活発化させるような工夫をしながら同窓会を支援している。JICA 研修員 OB は大臣など政府の中核に入っている方も多く、これが日本の国際戦略上、非常に有益になっているので、今回のアンバサダー・パートナー制度というのは、必ずや北大の大きな力になるのではないかと思っている。
- ・ キャッチコピー事業は非常に面白い。同窓会の活性化には苦勞が多い。JICA では各国でジャパン・フェスティバルのようなものをして、JICA 研修員 OB 同窓会に焼きそば作りなどブース出展をしてもらうことを通じて、日本を思い出してもらう。
- ・ 一つ、提案であるが、JICA の中に北大出身者が結構いる。仕事ではなくて個人のボランティアベースによるが、在外勤務の北大出身者が何かしらのサポートはできるのではないかと。また、JICA の同窓会というのがどんな試みをしていて、どんなことに苦勞しているかということも、しかるべき部署に聞けば、悩みを抱えてやっているはずなので、ご関心があれば紹介ができる。
 - 力強い助けありがとうございます。
- ・ アンバサダー・パートナーを北大 OB だけに頼ればよいのか。身近な潜在的なパートナーを大いに活用したらよい。例えば、札幌市にある総領事館で文教関係を担っている方で、北大の活動に理解のある人をパートナーにしてもいいかもしれない。外資系企業で北大と関係のある方、JICA のプログラムで来日した海外の人で北大のお世話になった人たちも潜在的なパートナーになり得るのではないかと。
- ・ 海外において北大のセミナーやシンポジウムを学部横断的な形で試みてはどうか。日本がノーベル賞を取れない時期にノーベル財団の事務局長と話をしたら、日本のいろいろな分野の研究者にストックホルムに来てもらい、ジャパン・アカデミックセミナーみたいなのをやってはどうかといわれた。そのように、北大にはいろいろな学部があり今こういうことに取り組んでいる、あるいは、この国との関係ではこういう取組が関係しているということをお話ができる人物をその国に派遣してセミナーを開催する。そういうときにアンバサダーにも入ってもらい、当該国の首相、教育大臣、アカデミー、そういう人たちに紹介していただく。そういうことが一つ考えられるのではないかと。

- 色々な形やレベルの研究交流会などを北大は海外で開催しているので、それとアンバサダー・パートナーとをつないでいくネットワークづくりはやるべきである。
- できれば定例化したらい。秋の第2週は北大の Science Explanation Seminars をやる。幾つかの Key Countries で定例化して、周辺の国や地域から人を招く。
- 北大のために頑張ってくれる方々と、どういうふうにコミュニケーションするか工夫が必要。OB を応援したいからという理由で予算を確保するのは厳しいかもしれない。国際入試や就職先の確保といった大学のレギュラーワークにつなげて、大学の予算を使える方法を活用するというのが考えられる。
 - 留学生のリクルーティングや、海外での留学フェアや研究交流に対して北大は、予算を投じている。
- 留学フェアほど効率が悪いところはない。労力をかけて、ブースを出して、30人の留学希望者に会うということをやるとしたら、その延長で海外の大学と協定を結んで来るぐらいの工夫が必要。
 - そういう業務間のリンクが、これから必要になってくる。これから財政がどんどん厳しくなるので、色々な業務とイベントをきちんとオーガナイズするのは大切である。
- 日本大使館がロンドンでミニセミナーズを開く外務省の予算がある。JSPS, JICA, 外務省関係の機関, JST も結構予算を持っている。文部科学省の高等教育局も大事であるが、何倍も多く予算があるのは JST や JSPS であるから、そちらにも目を向けることが重要。面白い企画は大使館と一緒に企画したらよい。大使館の広報ルートも使う, OB ルートも使う, 協定大学にも声を掛ける, いろんな意味で相乗効果が出る。やってみて学ぶものが多いと思うので、取りあえずやってみてはどうか。
 - 色々なサジェスチョンをいただき、アンバサダー・パートナー制度の今後に広がりを持たせていただき大変感謝している。

議題5 学部における留学生増加策について ～Integrated Science Program と Modern Japanese Studies Program を中心に～ (資料5)

議長より、資料5に基づき、Integrated Science Program (以下、ISP) の計画を中心に学部における留学生増加策について説明が行われた。その後、次の意見及び質疑応答があった。

- 非常にチャレンジングな構想をお考えになっているという感じがする。そもそも、まずいい学生が来なくてはいけない。ISP はかなり専門もあるし、英語もあるし、日本語も少しやっておかなくてはいけない。リクルートポリシーというのをどうするのかというのが一つ。もう一つは、ISP は学部だけで終わるといことか。むしろ、その後の修士も期待しているということか。

→ 修士への進学を期待している。しかし、修士課程に入るとき、入試なしで学士・修士一貫というのは、今はやらない方がいいと思っている。

- ・ 総合科学技術会議の原山さんという女性の方がまだ OECD にいたとき、特に修士、博士の科学技術人材をどう育成していけばいいのかというプロジェクトがあった。どれだけ科学技術人材を特に先進国が必要とするのかということだが、日本もそうだが、下手をすると、非常にナローになってしまう。結局、研究者にもなれない、ビジネスの方に行ってもだめだという隘路が生じてしまう。そういう人たちをどうするのかということが議論になった。イギリス政府は大学に対してずいぶん補助金を出して、ある程度、いろいろなキャリアパスを考えた上で、特定の領域の専門家だが企業研修をして、ISP のカリキュラムがいうところのマネジメントや、あるいはコミュニケーション能力などを醸成する手助けをするとき、そういう補助金が活用できる。ISP の学生の将来のキャリアパスをどういうふうに考えていくのか。そこのところから、逆に、どういうふうに ISP の制度設計をしたらいいのか考える必要性を感じる。
- ・ 今まで日本はどちらかというと、学部における専門研究はオタクづくりであった。ISP はオタクづくりではない、もう少し汎用的な能力を持っている社会性の高い学生だという気がする。私は日本の大学の工学出身だが、日本の工学分野は **Master Engineering, Doctoral Engineering** であって **PhD** ではない。学年が上がるほど教養はおろそかにされてきた。しかし、今の国際的な流行は、もう少し社会性、汎用性がある人づくりである。そこを注意して制度設計しないで、どこかにあるプログラムを寄せ集めにしてしまえば、先ほどおっしゃった落とし穴に入る（隘路が生じる）ので、そこを用心深くやった方がよい。
- ・ ISP は、アジア諸国の中で、質の高い **General Science Degree** を学部レベルでやるという方向ではどうか。**Physical Science, Chemical Science, Bioscience** といった分野と連動する。これは必ずしも、**Doctoral Engineering** 的なオタクや職人ではない。職人芸が必要なときには、日本語は不可欠であるが、**Good General Science Degree** は、日本語はたどたどしくても **Science, Mathematics** の力量で、何とかなる。学生は **General Science Degree** を目指して学び、学年がだんだん上に行くにつれて長く日本にいるから最低限の必要な日本語もずいぶんとできるようになる。
- ・ 3 年次の編入生受入を含めた設計をしてはどうか。母国で 1~2 年間は日本語を学ぶ。日本語を学ぶ仕組みだけを、アンバサダー・パートナー制度といった先ほどの OB 組織に頼むなど、日本語力をなるべく母国で養ってもらい 3 回生の時に ISP へ編入させる。これは海外の良いパートナー大学と一緒に始めても構わないと思う。その大学から学生が ISP へ編入した後、マスターやドクターまで進学すれば、いずれ母校の教員として帰るとか、そういう循環をつくり得る。何かそういう戦略を持って、ISP を始めた方がいいと思う。
- ・ 日本の教員は、**Science** や **Engineering** を学部生にきっちり教えなければいけないという、すごい責任感、職人的な正義感を持っている。ISP は違うものだとして位置付けて、国際社会の **General Science Degree** と連動するものであり、日本人であれば帰国子女を入れたり、海外

の大使の子どもなども入れるような器にして、既存の理学部や工学部とは別な魅力をここに
つくらなければいけない。大変なところはそういうところだと思う。だれも歩いて行ってな
いところを、日本の中で歩んでみなさいということだ。

- **ISP** はすごくチャレンジングでありながら、すごく魅力的に感じる理由は、日本にある英語
のプログラムがほとんど文化系だからである。先進諸国の日本文化通の人々が来て学ぶの
には良かった。しかしアジアから誰も金を払って日本文化を学びに来る人は少ないと思う。億
万長者の娘などは来るかもしれないが、普通の優等生は来ない。アジアが日本に感じている
魅力は **Science, Engineering and Technology** である。そういう人が、この **General Science
Degree** を通じて知識を入れられるパスを作っておけば、それがキャリア・パスに通じると
思う。そうしたら、日本の企業にとってもすごく魅力的な人材になる。アジアの学生にとっ
ても、日本のそういう代々の **Science and Engineering** の知識にアクセスできる。**ISP** の入
り口を、アジアの学生向けに近づけてつくったらいいのではないか。

→ まさに現代日本学プログラムへは、韓国人や中国人が全然来ない。入学願書の段
階から来ていない。ほとんどカナダ、アメリカ、北欧、ヨーロッパ、アフリカの
少しと、シンガポール。南米からは今年初めて入学願書が来た。

- **Science** の場合、欧米から人は来ない。
 - **ISP** はどちらかという、東南アジア、インドの辺りをターゲットにしている。
- イギリス系の植民地である、インド、スリランカ、バングラデシュ、タイも影響している
と思うが、基本的には **Engineering** より **Science** 系が強い。だから、**ISP** はアピールしやす
い。**Engineering Laboratories** とか、日本のゼミ制度とかを1、2回、現地ですれば **ISP** の
魅力が各国で伝わるのではないか。現地でフリープログラムとして、現地の大学に通う学部
生を相手にその大学と共同指導をやるような仕組みを作っても良い。マスターまで面倒を
見ると言えば、3回生で北大に編入して4年間北大に居るだろう。優等生をドクターに進学
させれば、日本滞在が7年になるので、日本語も十分できるし現場力も付いてくる。
 - 今後も進捗状況を報告させていただき、いろいろなご意見をいただきたいと思
う。

議題6 来年度の開催日程について

事務局より、平成28年度の開催日程について、全体会を7月、国際分科会の第1回を5月
下旬、第2回を1月または2月に行う予定であり、後日、日程の調整を行うことが説明され
た。

最後に議長より、活発な意見交換が行われたことに対して、お礼が述べられた。

以上